

疫病と天皇の思い

にしわき
西脇 美穂
(しがく総合研究所)

カレント 2021.6 • 74

今上陛下は二年前の五月、国民の幸せと国の一層の発展、世界の平和を切に希望されながらご即位された。在位期間の約半分はコロナ禍と重なっており、皇室のご活動は制限を余儀なくされ、国民と直接対面する機会は激減した。その間、国民の生活は一変し自ら命を絶つ人も多くいた。この状況に対する今上陛下の御心を、お言葉から読み解き、この困難な状況への向き合い方を考えたい。

今上陛下のお気持ち

今上陛下は令和三年のお誕生日に際しての記者会見にて、次のようにご発言された。「日本の歴史の中では、天変地異や疫病の蔓延など困難な時期が幾度もありました。これまでの歴代天皇のご事蹟をたどれば、天変地異等が続く不安定な世を鎮めたいとの思いを込めて奈良の大仏を作られた聖武天皇、疫病の収束を願って般若心経を書写された平安時

代の嵯峨天皇に始まり、戦国時代の後奈良天皇、正親町天皇など歴代の天皇はその時代時代にあつて、国民に寄り添うべく、思いを受け継ぎ、自らができることを成すよう努めてこられました。」今上陛下のお言葉には、新型コロナウイルスで苦しむ国民を見て、歴代天皇の様に国民に寄り添い、この状況を打開したいという強いお気持ちが見れている。

疫病と向き合われた歴代天皇の姿

今上陛下が紹介された第四十五代聖武天皇の時代には天然痘が流行し、当時の総人口、約四百五十万人のうち百〜百五十万人が亡くなったと言われている。そんな中、疫病名、症状、治療法、生活上の注意点、飲食の調理法などを書き記した、太政官符と呼ばれる公文書を隣国や国内の百姓たちに広め国民の疫

病対策の指標を作った。その当時は情報が無く不安だった国民の心を和らげるものになった。また、仏教の力による救済を目指すべく建立の計画をされたのが奈良の大仏。聖武天皇は国民に「朕の力だけでもことは成就しようが、それでは形だけのものとなる。ついでには知識に加わる者たちよ、ぜひとも至誠を發し、思いを込めて協力してほしい。」と、国民に協力を求めた。この大仏造りには当時の人口の半数が関わり、物資や命の糧を尽くし完成。このように、国民と共にお心を尽くす聖武天皇の姿が見られる。

第百五代後奈良天皇の時代は、先帝の後柏原天皇の葬儀を行う費用や、自身の即位式を行う事も延期せざるをえないほどの皇室貧困の時代といわれていた。そんな中、疫病が流行り多くの国民が苦しみ亡くなっていった。

その時、後奈良天皇は筆を動かすのも難しい金粉を使った金泥で、般若心経を何回も写経した。古来より般若心経は、宗派を問わず、心を穏やかにするために記されて来た。後奈良天皇が写経した般若心経の奥書には、「今ここに天下大疫、万民多く死にのぞむ。朕、民の父母として、徳を覆うこと能わず。はなはだ自ら痛む。ひそかに般若心経一巻を金字に写して（三宝院の）義堯僧正をしてこれを供養せしむ。こいねがわくは、疾病の妙薬となさんことを」とある。自身は「民の父母」でありながらも国民を苦しめている事への自責が見られ、天皇としての深い自覚が感じられる。またこの疫病を収めるための祈祷を六日間宮中で行っており、国民を思う心は、実に深く厚いものである。このように、自身を守るのでは無く国民のために大変な写経や

祈祷をしている。

今上陛下の御意思

今上陛下のお誕生日に際しての言葉の続きに、「(歴代天皇の)その精神は現代にも通じるものがあると思います。皇室の在り方や活動の基本は、国民の幸せを常に願って、国民と苦楽を共にすることだと思えます。そして、時代の移り変わりや社会の変化に応じて、状況に対応した務めを考え、行動していくことが大切であり、その時代の皇室の役割であると考えております。」と、発言されている。今上陛下は、歴代天皇の思いに触れ、その思いを受け継ごうという御意思が見られる。実際、折に触れて国民に「多くの人々が直面している様々な困難や苦勞に深く思いを致しています。」「新型コロナウイルスと闘っている

医療従事者の皆さんに、改めて心から感謝の意を表しますとともに、皆さんには、今後ともくれぐれも体に気をつけて」「高齢者や障害者など、社会的に弱い立場にある人々を支えてきた関係者や、子供食堂のような、困難な状況に置かれた子供たちを支援してきた関係者など、多くの方々からお話を伺う機会を得、皆さんの有り難い尽力に思いをより深く致しました。」など、お言葉を投げかけられ国民に寄り添われている。また、国民に直接会う機会が減った中で、国民の力になるために何ができるかを考え、宮内庁とご相談の上オンラインでの国民との交流も行うようになった。

そして、今年の新年ビデオメッセージにて「今年が、皆さんにとって、希望を持って歩んでいくことのできる年になることを心から

願います。ここに、我が国と世界の人々の安寧と幸せ、そして平和を祈ります。」と仰られた。新型コロナウイルスに脅かされる中、日本国民だけではなく世界の人々の安寧を願う今上陛下の思いが見られる。

私たちがすべき

コロナ禍への向き合い方

日本には、天皇の思いとそれに応える国民が、まとまることで国難を乗り越えてきた歴史がある。今上陛下はその歴代天皇の疫病と向き合われた思いを受け継ぎ、今できる事は何かを考え行動をし続けられている。

人との交流が減り孤独の中で希望を失う人が多い現在だからこそ、今上陛下の思いを受け止め、国民がまとまりコロナ禍を乗り越えて行くべきではないか。